
バレット・ブルー 蒼穹のアストライア

kazaisyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレット・ブルー 蒼穹のアストライア

【Nコード】

N0680X

【作者名】

kazaisyu

【あらすじ】

《イクリプス》。かつて地球人口の三分の一を消滅させた悪夢。悪夢から背を向けた人類が向かったのは宇宙だった。新しい世界、コロニーへと居を移して。しかし、そこに待っていたのは決して希望などではなく……。学園スペースオペラ、ここに開幕。

(HPと並行して隔週で連載中。URL: http://amaterasu.buzama.com/syou/bulletblue/rb_title.html 更新はHPの方が早いかも?)
タイトルに、サブタイトルを追加しました。

登場人物紹介

・九桐斎 くどういづき

主人公。目つき悪っ！でも中身は割と常識人。色々と秘密がありそうだったりそうでもなかったり。

二学年から転入してくる。良い意味でも悪い意味でもなぜか目立つ。割とシャイ(?)。

格闘から狙撃までこなすオールラウンダーで、機体操作技術は未知数。

なぜか妙にモテるが、本人にはまったく自覚がない。

・クリステイナ・キルヒアイゼン

斎と同居する金髪碧眼の美少女。「デキる女」で、恐らく本作中一番の常識人。そして苦勞人。

赤くなったり青くなったり叫んだり、色々忙しい割に実は出番が結構少ない。

とある『仕事』をしているのだが……。

・細峰結莉 ささみね ゆいり

三年の風紀委員。実は最初は風紀委員長だったのだが、設定の変更で格下げになった。苦勞人。

自信満々な割に浮き沈みが激しい性格。男まさりで、本作中で恐らく一番カッコイイ。でもBカップ。

実は、名前が七転八倒に変わりまくったという秘話を持つ。

主な搭乗機体は加茂富技研のKKD1 紫電。近接距離兵装に力スタマイズを施している。

・四方院楓 しほういん かえで

いいところのお嬢様＋成績トップ＋人当たりがいい＋生徒会長、とい

うまさにミス・パーフェクト。

大人に見えて、結構子供っぽいところがある。友達想い。

典型的な生徒会長タイプ。男女問わず大人気。まさにアイドル。

主な搭乗機体は平澤重工のS-I 1 桜華。一般的な中距離兵装だが、搭乗者の技術が半端ない。

・アンジェリカ・ロス

正鳳学院二年、主人公のクラスメイト。赤髪の美少女。

序盤で主人公に助けられ、以降助言役として登場。恐らく登場回数最多賞は彼女である。

強気な性格だが、別にツンデレではない。若干ややこしい性格。なんかクリスと被るし（作者談）。

ザ・天才と言える少女。格闘から銃撃、運動から操作技術全般、全てがトップレベル。

かがみ ゆきな
・各務雪奈

二年、主人公のクラスメイト。大人しい印象の黒髪少女。所謂ヤマトナデシコ。場合により眼鏡。

アンジーとは大の仲良しで、なんでもそれまでは友達がいなかったらしい。

アンジー以外と話す時は大体敬語。さらっと毒舌を言うこともある（悪気なし）。

くろせ いづみいちろう
・黒瀬晃一郎

二年、主人公のクラスメイト。悪友であり、そして馬鹿である（断言）。

恐らくドラグリーンへの情熱だけは誰にも負けない。得意授業は体育です。

非常に背が高い。多分作中で一番高い。しかしそれだけである（酷え）

みやへ そうか
・宮部 蒼嘉

二年、主人公のクラスメイト。チビ、可愛い、甘えん坊、そして同人誌の恰好の的。

常に隼人と一緒に行動する。主人公が転校してからは主人公にもなぜか妙に懐く。

いわゆる子犬みたいな少年である。

よしみ はやし
・佳美 隼人

二年、主人公のクラスメイト。美形だが常に無口、そして無表情。基本的には蒼とセットで、単独でいることはなかなかない。

何事もそつなくこなす。しかし表情は変えない。ただの天然ボケという説もある。

いちじょう みなみ
・一条 南

ザ・クールビューティー。生徒会副会長、そしてブレインである。

すらつとした美人で、そして眼鏡である。毒舌かつ冷たい。でもちよつと動揺に弱い。

彼女はDSなのか隠れMなのか、という議題で生徒会が揺れたことがあるらしい。

はるむち しゅう
・春寺 嵩

ナンパ男。チャライ。茶髪。でも通称は『不動の春寺』だったりする。ただのサボリという説も。

生徒会執行部部长。結莉にとっては一応上司みたいなものだが、誰も気にしたことはない。

いつも副会長に刀で脅されている。だが本人はそれを楽しんでいるという説もある。

るべんじょう ひつじ
・鹿堂 聖

通称、スーパーメイドひじりん。なぜかいつもメイド服。そしてなぜかいつも日本刀を携帯している。

生徒会執行部副部長。彼女をして出来ないことはないと言われる超メイド。

慇懃無礼と毒舌を足して2で割ったような性格。黙っていれば完璧である。

・東郷龍平
とうきゅう たつひら

生徒会調停部部長。なのだが本当は諜報部とか似合いそうな人。通称スーパー忍者。

どこからともなく現れて、どこへともなく消えて行く。そんな感じの人。文脈の中で唐突に現れるので、実はとっても書きにくい。

怖い気がするけど、実は何気なく気が効く良い人。空気王（空気読める的な意味で）。

・三枝鈴音
さえぐさ りんね

名前だけ出て登場場面はまったくなく、むしろ出てこない、可哀想な人。二章で頑張れ。

生徒会調停部副部長。蒼とコウを足して2で割り、さらに女にしたらこんな感じになる。

馬鹿＋能天気＋KY。そしていつも無駄に元気いっぱいフルパワーである。出番は無いがな！

・雪宮忍
ゆきみや しのぶ

工学科でメンテナンス長を務める天才。電子委員会委員長、さらにメンテナンス部の部長を兼任する。

その腕は第一線級で、結莉や楓も彼女を信頼している。所謂ドラグーン馬鹿だが、話し方はぞんざい。

なんだか色々パロディが詰まっていたりする人。

・城里啓一 しろさと けいち

結莉に喧嘩を売った二年生。

・各務紗枝 かがみ さえ

主人公の担任。出番は基本的でない。しかしどうでもよさそうな人。
さえちゃん先生。

登場人物紹介（後書き）

なんだかまだ登場してない人も載ってたりするよ！
でも気にしないでね！

ブローグ

——鋼鉄が疾駆する。

強化合金によって作られた銀色の壁柱が、瞬きほどの速さで後方へと流れていく。

その数、四。

それはまさしく、流星であった。緋と銀の色で彩られた、一筋の流星。それが宇宙という漆黒を、美しく、しかし暴力的なまでの速度で滑り落ちて行く。

それが本物の、鉄の流星であったならば、違いなく人類にとっての脅威であった。

しかしそうではない。もし速度を度外視したとしたら——はつきりと見えたはずだ。

その鋼鉄が、人型であることに。

しかしたとえそれが流星ではないとしても、脅威という意味では、同じかもしれない。

それは機械である。それは兵器である。

容赦もなく人を踏みつぶし、銃弾をばら撒き、全てを無意味な残骸に変える。四メートル級の鉄の巨人は、間違いなく、ヒトに対する脅威であるに違いないのだ。

流星の如き残影は、軌道エレベーターの内側を、影から影へと駆けて行く。

『——目標地点まで、残り六秒です』

（目標？）

スピーカーから流れる声に、はっとした。

……不意に、脳裏に冷たい電撃が走る。

（え？）

自分はいつたい、何をしているのか？　ここはどこだ？

目標とは何なのか。そして自分の駆る、この機械は何なのか。

不意に、分からなかった。

『目標地点まで残り三秒です。減速してください。警告です、減速してください』

突然のアラームと共に、眼前の画面に赤い警告画面がポップした。スピーカーから流れる女性の人工音声が、警告を告げている。

（減速……！？）

わけがわからないまま、手元にあるレバーを後ろに倒した。

がくんつ、と機体が大きく揺れる。それと同時に、先ほどまでにあった重く苦しい重圧が遠のいていく。だが……それだけで済んだわけでもなかった。

同時に、まるで振り回されるように、コックピットが二転三転する。錐揉状態で落下しているのだと、不意に気づいた。

『姿勢^{AC}制御、十パーセントに減衰。警告、アティテュードコントロール、システムでは回復できません』

脳裏に幾重もの警鐘が鳴り響き、未だにまったくの状況がつかめないまま、両手がシートの左右に四本配置されたスティックへと伸びる。

そこから先、どうやったのかは、自分でもよく分からなかった。

ただがむしゃらにスティックを操作し、どうにか回転を止め、姿勢を安定させる。同時、かつてシステムが警告した三秒間が経過し、軌道エレベーターの壁面を、足の裏（といっても機械の、だが）で火花を散らして削り取りながら静止する。

「はあ……はあ……」

『アティテュード、クリア。機体制御、回復。速度の停止を確認。作戦目標地点に到達しました』

（なんだってんだ……！）

毒づく。しかし急激に圧迫から解放された肺が、言葉を放つことすら許さない。早鐘のように脈打つ心臓は、痛いほどに呼吸を圧迫

していた。

状況が分からない上に、この有り様である。当然ながら、頭の中は混乱の極みにあった。

そんな彼が、毒づく以外に、意味のある行動を起こせたのは……
眼前の光景が、あまりにも美しかったからである。

息を呑む。

そこには——地球という名の、惑星^{ほし}が、あった。

地球、という名の惑星^{ほし}がある。

太陽系に属し、海があり、空気があり、生命とがあつた。そういう惑星である。

しかし、たったそれだけで、語る言葉が終わるはずがないのだ。

我らの……母なるこの星が。

太陽系第三惑星、人の故郷。……言葉を重ねたところで、そこには本当の真実はない。

地球は我らが故郷にして、今や帰れることのない死の大地なのである。

破綻は、ある日突然に訪れた。

千死病。片隅で生まれたその病は、しかし二百七十四日という短さで、世界を席卷した。

それはまさしく災厄であつた。あらゆる対策手段が生まれ、その悉くが水泡に帰し。ついに、虐殺という名の隔離政策さえもが無駄だと悟った人類は——その頃ようやく現実化した、宇宙移民政策に縋りついた。

……そしてその時既に、人類は、三分の一以下という悪夢のような数へと減じていた。

——イクリプス。

その悪夢は、そう呼ばれた。

人は、地球を捨てた。

これは比喻ではない。事実、人々は、自らを殺し尽くさんとする悪夢から逃げ出し、そして生き延びた。これは何も驚くことではないし、不自然なことでも、責められるべきことでもない。

生きようと欲する意思こそが、命が命として在る源泉である。そういう意味で、彼らは英断した。

人は——宇宙に救いを求め、そして救われたのだ。

しかし、救われなかった者もいた。

宇宙を眼の前にして、病に倒れたものがいた。

狂気と恐怖に唆された人々による、戦争と言う名の殺戮もあった。

——自ら地球に残り、悪夢と戦うことを選んだ人々もいた。

かくして時は流れ。

世界も、悲劇も、止まることはなく。

そして——二百年と言う、長い月日が流れ去った。

斯くして物語は紡がれ始める。

それは宇宙での物語。コロニーと呼ばれる新たな世界で、人々は歩み始める。

その先にあるものが、希望であるのか、絶望であるのか、それすらも分からないまま——。

プロローグ（後書き）

はじめまして、k a z a i s s y uと申します。この度は拙作を閲覧頂き、誠にありがとうございます。隔週にて定期連載予定となっております。

第一話 いつもの朝に

最初に見たものは、見慣れた白い天井だった。

最初に聞こえたのは、耳慣れた時計の音だった。

何の変哲もない、いつもどおりの部屋だった。そこにあるのは静寂と、静寂に紛れるわずかな息遣い。

部屋の中には、二人の人間がいた。要約すれば、自分と、誰かだ。
「……………」

睡眠からの覚醒。身体状態を確認——異常なし。危険がないらしいことは、すぐに分かった。自分でない誰か……要約すれば侵入者は、寝息を立てていたからだ。

——この時、彼は既に気づいていた。何が起きているのか。侵入者は、誰なのか。

ベッドの上で、天井を見つめていた目線を、ベッドの上へ下ろす。そこには……スヤスヤと寝息を立てる、金髪の少女の姿があった。自分の胸の上に頬を押し付けて、しかも割と幸せそうな顔で。

再び天井を見る。

……状況だけ見れば、恋人か夫婦が情熱的な夜を過ごした、その朝だ。

だが、二人がそんな関係であるわけもなく——当然、そんな事実がないのも自分が誰よりもわかつている。昨夜ベッドに入り、就寝するまでの間、確実に一人だった。

となれば、結論はひとつしかない。

こめかみを押さえながら——といっても、両手を少女に封鎖されてしまっているわけだが——溜め息を吐く。

こういう場合の対処方法は、既に確立されつつあった。

とりあえず、息を吸い込む。そして——

「キルヒアイゼン上等兵！ 何を寝ている、さっさと起きろ！」

怒鳴りつける声に、はうあつ、と眼を見開いたかと思うと、金髪を翻す暇もないほどに迅速に、ベッドから降りて敬礼した。

そして、今度はぱちくりと眼を瞬くと、こちらの顔を認めたのか、あ、という顔をした。

その少女の姿は、一言でいえば、可憐だった。すらりと伸びた手足の細さは、『華奢』といって相違ない。さらさらと光るような金色の長い髪、瞳は美しいスカイブルーを写し取ったかのような蒼。

その造形は、男が見れば十中八九見とれてしまうに違いないほどの、金髪碧眼の美少女だ。こんな美少女に朝から抱きつかれていたと思えば、鬱陶しい気持ちもどこかにいつてしまふ。それも事実である。

ゆえに、彼——九桐^{くどう}斎^{さい}は、いたって平静に、優しく朝の挨拶をした。

「……おはよう」
とりあえず挨拶をすると、「あわ、あわわわ」と慌てふためき始める。

普段の（それなりに）凛々しい姿を見ていると、どこか笑いを誘う光景ではある……のだが、今笑えば彼女の自我を崩壊させる契機になりかねないので自粛した。

「お、おはようございます、ちゅ——その、斎^{さい}さん」

「ああ、おはよう、クリス。とりあえず、俺のベッドで寝てた理由について聞かせてもらえるか？」

いや、その、と口を変えながら金魚のようにぱくぱく口を開閉する少女。白磁のような頬が真っ赤に染まっている。

そして唐突に、「失礼しましたーっ！」とダッシュで逃げ去っていった。

これもまた、見慣れた光景と言えばそうである。

（どうせ、また酒でも飲み過ぎたんだろ……）

——クリステイーナ・キルヒアイゼン。それが少女の名前だ。故あって今は共に暮らしているが、別に血縁関係があるとか、そういうわけではない。

もちろん恋人でもなければ夫婦でもない。

言ってしまうばただの同居人で、書類の上でももちろんただの他人だ。敢えて形容するならば……保護者、といったところだろうか。実を言えば、『もうひとつの』名前を聞けば誰もが驚く類の有名な人でもあるのだが、彼女がその話を嫌がるので、ここではやめておきたい。

ちなみに、見た目からはまだ十代の少女にしか見えないが、実は二十歳を超えている。

成人であるがゆえ、酒を飲む分には法律的にも問題ない……のだが、彼女が酒を飲み過ぎて酔い潰れ、拳句人のベッドで寝る、という悪癖が割とよくあるのも確かだ。人が眠っているベッドにもぐりこむ、というのも少なくない。

（弱い癖に飲みすぎるのが悪い……）

駄目人間、というような類の少女ではない。むしろ規則正しい生活を送っている方だ。

ただ、朝も夜も問わずに怒涛のように襲いかかる類の仕事は、彼女の中にどうしてもストレスを蓄積させてしまうのだろう。

とはいえ、ストレスのはけ口を酒ばかりに求めているは、体によくない。そろそろ何かひとつ趣味にでも目覚めて、新しいストレス発散方法を彼女も編み出すべきだろう。

うんうん、と頷きながら彼女が秘蔵している酒類の類を、今度どこかにひっそりと隠しておいてやろうと思った斎である。

無論、彼女が知れば泣いて止めるだろうが、それで全てが片付くほど人生は甘くない。今のうちに、そういうことを叩きこんでいた方が彼女の為だ——きつとそうに違いない。

密かな決意を固める斎のことを、朝ごはんを支度すべく台所で駆

けまわるクリスを知る術は、無論なかった。

「ごちそうさま」

「ごちそうさまです」

クリスの作った朝食（ちなみに斎の希望で今日は和食だ）に下鼓を打った後、残った食器を重ね、台所まで持って行く。

それに倣ったクリスに、斎は片手を振った。

「ああ、置いていてくれ。片づけておくから」

「あ、すみません」

敬語でクリスが返す。下ろしていた髪は、今はポニーテールにまとめられている。今朝の無防備な雰囲気とは違い、もういつものしつかりとした雰囲気が変わっていた。

なお、家事は分担だと最初に決めているので、斎としてはごく当たり前のことでしかない。

ちなみにだが、彼女の方が年上であるので、当然ながら敬語は本来必要ない。が、忠告するたびに「好きでやっていることですから」と返され、苦笑はしても止めてはくれないのだ。

とはいえ、彼女との付き合いも長い。もう慣れたが、若干むずがゆい時もある。

ちなみに最初はと言うと、むず痒いどころか勘弁してほしいと思ったものだ。そう思えば、なるほど、人間は成長する生き物だと実感する。

「そついえば斎さん、今日は入学式ですよね」

「ああ」

四月一日。春の訪れるこの季節は、ここ日本ではごく当たり前に入学式の季節である。

当然斎も、その準備は昨日のうちに済ませてあるので、クリスの手を煩わせるところはない。疑問に思いながら、素直に頷いた。

「その入学式って、私も……その、行つていいんでしょっか？」

ん？ と眼をやると、彼女の頬は若干朱に染まっていた。

当然ながら、入学式にも父兄の参加枠というのはある。確かに、説明会の時に、もらった書類の隅に書いてあった記憶があつた。彼女の仕事についても、今日は休みだと聞いている。ただ……

「……目立つからな、君は。俺の知り合いだとバレたら、少し面倒だ」

「だ、大丈夫です！ 潜入任務も経験があります！」

「そつという問題ではないんだが……」

ただ、彼女の名前は嫌というほど知られているが、顔は実のところあまり知られていない。その理由と言えば、何せ、本人が写真を撮られるのを嫌がるからだ。

何でも、写真は嫌いなのだと言っていたことを聞いたことがある。

(……フム)

皿を無意識的に洗いながら思案する。その間も、彼女はずっとこちらを見つめていた。

「……まあ、別にいいか」

「い、いいんですかっ!？」

飛び上がるように——あるいは飛びつくかのように——ぱつと彼女は顔を輝かせる。

何がそんなに楽しいのか分からないが、まあ、別にバレないだろう。万が一バレたとしても、自分の知り合いだということは彼女も明かすまい。

第一、彼女は既に何度か買い出しで外に出ている。それでもバレていないのだから、それほど難しい話でもないはずだ。

「ただ、ある程度の変装はしてきてくれ。帽子を被るぐらいでもいい

い。バレないに越したことはないからな」

「了解です！」

それを聞くや否や、彼女はダッシュで部屋に駆け込んだ。苦笑しつつその背中を見送る。

（まったく……思い立ったら速いな）

いつもそうだ。いつでも全力。そんな彼女だからこそ、少しばかりのわがままなら聞いてやりたくもなる。

……ただ、この時の彼は、若干見通しが甘かった。

それを彼が認めざるを得なくなるのは、あと三十分は先の話なのだが。

塞翁が馬、という諺がある。

——幸運が転じて不幸となり、不幸が転じて幸運となる。

そういった意味合いであるが、当然、そうでないことの方が圧倒的に多い。不幸は所詮、不幸以上の何ものでもないし、幸運は所詮幸運であって、必然ではない。よって、何の気もなしに不意に起こるし、そしてその偶然が、或る一人の人生すらも壊してしまうことだつてある。

不幸にせよ、幸運にせよ、それは同じことだ。

よってこの時、九桐斎の身に起きた不幸が、後々になって取り戻せるとは断言できないのである。そして断言しよう。彼女の身に起きた事件は、あくまでも事故であって、故意ではない。断じてない。……さて、では言い訳をしよう。

食器を洗え、まずランニングに向かった。日課である。約12kmの距離を走り終えたとき、既に三十分は経過していた。

そして学校へ行く準備を整える。服を着替え、鞆の中のタブレットPCを確認し、部屋を出る。

さて、それじゃあ時間もあるし、クリスマスに準備が出来たか声をかけてみるか、ということを唐突に思い付き……そして、それが悪かったのだろう。

トントン、と部屋のドアをノックし、そのままドアノブを握る。

「準備は出来た……か……」

言いながら、がちやり、とひねった。言葉の最後が消えかかっていったのは、その先にあった光景に、思わず絶句したからである。

そこには、ズボンを脱ぎかけた状態のまま硬直した、金髪の少女が居た。

上に着る白い服ははだけられ、彼女の前に設置された鏡からは、形のいい胸と純白のブラとが覗いている。そして眼前には、同じく白のパンツに包まれた彼女のお尻。

彼女のスタイルの良さと肌の白さに改めて驚かされながらも。この段階で、既にもうどうしようもない窮地に立たされてしまったのだと、九桐斎は理解した。

そして起こせるアクションは、彼の場合たった一つ。

「……失礼した」

がちやり、と扉を閉めて外に出る。

「——■●%っ！？#@——っ！？」

扉の中から、言葉にもならないような悲鳴が轟いた。

「……すみません……」

それから十分後。斎による誠心誠意をこめた（扉の向こうからの）謝罪にようやく折れたのか、がちやりと彼女はドアを開けた。

おずおずと頭を下げたその顔には、申し訳なさや恥ずかしさが半分半分くらいで映っていた。未だ頬を若干赤く染めつつも、こちらに視線を合わせようとはしない。

「お待たせしてしまった拳句、お見苦しいものを……」

「いや、お見苦しくはない。クリスは綺麗だからな」

言ったとたん、「はうあ」とクリスはまたもや頬を染めた。褒め言葉に弱いことは普段の経験から分かり切っている。こ誤魔化されるのは彼女としては本意ではないだろうが、無論、彼女が綺麗だと思うのも真実であるから問題ない。

……ともあれ、そんなこんなで。ようやく、彼らはそうして家を出た。

登校路を並んで歩きだす。

お互いの服装としては、斎は無論だがただの制服で、対して四五分という長い着替え時間を使ったクリスは、白のワンピースに鰐広の帽子……いわゆるサハリハット、という出で立ちであった。

こちらの視線に気づいたのか、クリスは少しだけ目をそらすと、ためらうように、言った。

「……その、似合ってますか？」

「ああ、とても」

お世辞ではなかった。クリスもそれを理解したのか、ぱっと花のような笑顔で嬉しそうに微笑んだ。

それに、とクリスは言った。

「髪も下ろしてますし、帽子で隠してますから、まずバレないと思います」

「そうだな」

確かに、いつものポニーテールが、今はロングヘアに変わっている。美しい金の髪が、さらりと風に揺れる。

なるほど。目の前にこうしている彼女は、普通の少女だ。多少、というか、過分な脚色をせずとも十分すぎるほどの美人ではあるが、それだけだ。

斎の言葉を皮きりに、二人の間に満ちたのは、朝の静謐さを含ませた沈黙だった。

しかし不快ではない。それはお互いにだったのだろう。二人の歩く速度に、淀みはない。

「……学校かぁ」

彼女が口を開いたのは、五分かけて歩き、ターミナルのゲートについた時のことだった。

ゲートで指紋とパスを認証し、構内に入る。ターミナルは、コロニー全体を縦横無尽に走る輸送エレベーター……通称『クレードル』へと繋がる。エレベーターといっても個室式で、最大で時速は300 kmにも及ぶ代物だ。

しかし、今この『クレードル』は、やや斜め下方向に向かって、時速50 km程度の緩やかな速度で輸送路を滑っていた。だが、たとえ300 kmの速度を越えても、その振動や苦痛といったものはまったく内部には伝わってこなかっただろう。アーマードにも応用される重圧軽減装置のおかげだ。『揺り籠キャンセラークレードル』の名はここに由来する。

斎は、クリスの言葉に何も返さなかった。

返さなかった、というより、返せなかった……といったほうが正しいだろうか。そもそも今の言葉は、答えを欲している風でもなかった。今も彼女の視線は、自分ではなく窓の外を流れて行く景色を見つめている。

その視線につられて、同じく斎も外に眼をやった。

地面は、緩やかな湾曲を描き、そしてその端で、上空へと湾曲していく大地は、白い霞に隠されて消えていく。やがてそれは白から青へと代わり、やがて澄み渡る蒼い空に、薄い雲が流れていく。

それは偽物だ。ホログラフィック 本来は、この上空で誰かが暮らしている大地が見えるはずなのだから。しかしそうと分かっているにも、斎は、その空は美しいと思った。

だからきつと、地球の空はもっと美しいのだろう。

「綺麗ですね」

「ああ」

素直に答える。毎日のように見ているこの光景が、何度見ても飽きることがないのは不思議なものだ。本来、コロニーに青空はなかったが……精神的にどうかというような話になったらしく、上空には、精巧な青空を模した立体映像が映し出されていた。

——コロニー。かつて提唱され、そして様々な経緯を辿り、そして今に至った人の居場所。

それはかつて、宇宙にある仮初めの宿として造られた。しかし今や、人類が決して欠かすことの出来ない居住の地となっている。

たとえば今、自分たちが暮らしているこのコロニー……日本国第二十一番コロニー『アストラライア』は、およそ360万人がその生を営んでいる。それが日常であり、それが今の人々の一生だ。

……人は、コロニーで暮らし、コロニーで死ぬ。

もちろん、それが月ということもあるし、火星ということもあるいはもしかすれば、ようやくテラフォーミングが始まった、地球ということもあるかもしれない。

しかし総じて言えば。……人は今、宇宙で生きている。

不意に、クレードルの機械音声が、目的地への到着を告げた。

景色が急速に変化していく。クレードルが音を立ててその速度を弱めると、青空だった景色は漆黒に変わった。ターミナルの中に入ったのだ。

がしゃり、と音を立ててクレードルがドアを開く。到着だ。

さて、と鞆を掴む。

「それじゃあ、行こうか。学校に」

「はい」

微笑みながら頷いて、クリスも立ち上がる。

——結局。最後まで、彼女の言葉の意味を聞けないままだったと、

斎は思った。

だが、それでもいい。時間は山ほどある。聞きたい時に聞けばいい。彼女の話したい時に、聞いてやればそれでいい。

きっと、人生とはそういうものなのだろう。

第一話 いつもの朝に（後書き）

話数が話数なので、二話につき一話でまとめて更新しようと思ったんですが…それもそれで面倒なので。なお説明は読むのが面倒臭くなりかねないので極力少なめですが、世界観については徐々に徐々に明かされていく予定です。11/4 一部本文を修正しました。

第二話 機甲学校

かくして、入学式である。

堂々と「機甲正鳳学院きこうせいほうがくいん」と書かれた校門へと背を向け、意味もなく天を仰ぐ。場所は間違いなし、時間も問題ない。問題ないのだが……。

「何だか、見られてる気がするんですが……」

気がする、で済む問題では無論ない。校門を潜ろうとする生徒たちは、校門に背を向けて佇む二人に、好奇心と奇異の目を向けて行った。隣に佇むクリスは、借りてきた猫のごとく下を俯いていた。

「落ち着け。別に正体が看破されたわけじゃあるまい」

「で、でも、でもですよ？ 万が一ということもっ！」

「いや、ないと思うが」

もしその万が一が起こっていれば、こんな程度で済むはずが絶対はない。

「し、しかしですね……じゃあなぜ、皆私のことを見ていくんですよう……ジロジロと……」

「それは——」

生徒じゃないから、と言いかけて、やめる。今日は入学式だ。無論、父兄と共に来る人間などゴマンという。実際先ほどから何度も、父兄らしき人物が校門を過ぎ、同じような目線を自分たちに投げつけていったのである。

ではなぜか。もちろん、彼女の正体が看破されたということではないだろう。

となると……

「……やはり、クリスが美人だからじゃないか？」

これしか思いつかないな、と思いつつ斎は言った。

先ほどから言っているように、隣に立つクリスティーナ・キルヒアイゼンという少女は、控え目に評価してみても絶世の美少女だ。そんな人間が、校門の前に佇んでいるとなれば、ジロジロと見ない人間のほうが少ないだろう。

そしてその瞬間、斎は理解した。男性に限りだが、少女に目線に向けた後、斎をなぜか殺気やら悪意やらを乗せた目線で見ていたのだ。どうやらそれは、何の理由もなく本能的に憎たらしいとか、なんとなく顔がむかつくとか、前世で敵対していたからとか、そういった短絡的な理由ではなかったらしい。

ふむふむ、なるほど、と彼は顎を指で擦る。

その隣で、少女が顔を真っ赤にして俯いていたのだが、それに気づく気配もなく。

「しかし……どうして、わざわざこんな目立つところに居なければいけないんでしょう……」

さらに幾度目かの視線を浴びたあと、少女は嘆息しながら疑問を告げた。

「いや、ここで待っているとされた。迎えに行くから、とな」

なるほど、と頷きながらも、更なる視線を浴びせかけられ、少女はさらに沈んでいく。

——機甲正鳳学院。名の示す通り、日本の有する機甲学校である。機甲学校。耳慣れないこの言葉は、近年によって創始された学業形態だ。

機甲……アーマードと称される大気圏内外で活動可能な装置、すなわちロボット。これを研究し、開発し、そして操縦するために創始されたものだ。

ただその比率は、前者二つにくらべ、最後の一つに重きが置かれている。即ち、操縦だ。言ってしまうえば、機甲学校とは軍事用の機アーマード・アサルト

甲兵器のパイロットを育成する、軍学校の類である。

こうした機甲学校の創立には、ここ百年のうちに高まる軍事的緊張によって、国民皆兵ならずとも、パイロットの一部の技術を底上げすることで、軍備を拡張しようという中央政府の思惑が――。

などと、益体もなく斎が考えていた、その最中。

ふと、構内に視線を向けると、一人の少女と目に合った。恐らく学院の生徒だろう、凜々しい、という言葉が似合いそうな少女だ。それが真つすぐにこちらに走って来る。

「すまない、待たせたな」

自分たちのすぐ目の前で立ち止まると、息を切らした様子もなくそう言った。

その黒髪をセミショートにした少女は、どうやら上級生らしかった。その身に纏った白と碧を基調としたブレザーに、上級生の証である青のワッペンが見て取れる。

瞳の色は、日本人として平均的な黒だ。背は、斎よりはやや低い、女子としては長身だろう。

恐らく彼女が、今日待ち合わせの予定だった人物なのだろう。それを早々に理解した斎は、「いえ」と首を振った。

「こちらの方が早く到着してしまっただけですので、謝られることは……」

斎の言葉に、「そうか」と彼女は少し笑って答えた。

改めて近くで見ると――なるほど、確かに美少女と言える類の少女だろう。凜とした静謐な空気を纏っているような気さえもする。

「九桐斎くん、で間違いないか？」

「ああ……はい。九桐斎です。よろしくお願いします」

斎の言葉に「そうか」と頷くと、少女は横に佇むクリスへと視線を向けた。

「それで……そちらの方は、血縁の……？」

少女の目線に倣って、クリスを見る。無論、事前から完璧に用意していた笑顔で、クリスは即答した。

「クリス・アルヴァンスと申します。血縁、というわけではありませんが、斎の義姉として来させて頂きました」

「そうですか……いや、失礼なことを聞いて、申し訳ない」

少女は申し訳なさそうに顔をしかめると、深く腰を折った。

苗字も違うのに、義理の姉。そういったややこしい事情を汲み取ったのだろう。だがそれに、クリスは微笑んで答えた。

「いえ、大丈夫です。大した事情ではないですし、私も斎も、気になんてしていませんから」

少女が、今度はこちらに視線を送って来る。斎は迷いもなく頷いた。

「そうか……」

それで納得したのか、少女は顔をあげ、小さく微笑んだ。

「ありがとうございます。ああ、そうだ——」

何かを思い出したのか、少女は呟いて再び斎と目を合わせ、握手を求めて手を差し出した。

「私は細峯結莉。三年だ。正鳳学院の風紀委員を務めている。よろしく頼む」

そう言って、朱色の腕章を掲げて見せる。それがどういう役職なのかはいまいち分からないが、斎は「はい」と頷いて彼女の手を握った。

「よろしく願います、先輩」

「ああ、よろしく」

凜とした空気がふつと緩む。

本当に自然な笑顔だった。思わず——自分の中の“何か”を想起してしまうような。

しかし、その“何か”が表層に現れるよりも前に、彼女——結莉

は笑顔を消し、真面目な顔で向き直った。

「それでは、今から体育館の方へ案内する。クリスさんの方は、他の委員が案内します。——おい！」

彼女が背後に向けて呼ぶと、校庭で何か話しながら周囲を見回していた生徒たちのうちの一人が、小走りに走り寄って来る。

「駒沢、この方を父兄方の席に案内しろ」

「はい、分かりました」

駒沢、と呼ばれた少年は、柔らかな笑みを浮かべて頷いた。同性の目から見ても、魅力的に映る類の笑顔だ。爽やかな好青年、という言葉が一番似合うだろう。

彼にしか聞こえない声で、『頑張ってください』と告げてから。

こちらです、と案内を始める少年に従って、クリスは歩を進めた。

「随分と綺麗なお姉さんだな」

歩きながら告げる彼女の言葉に「そうですね」と答えるわけもいかず、答えに窮しつつも校舎へと視線を向けた。

改めて見れば、まあ、普通の学校だろう。もちろんそう違いがあるわけではない。

ただ……意外な点が一つ。

（監視カメラスフィアの数が少ないな……）

通常、現代の学校のみならず、施設という施設のほとんどは、監視カメラが大量に設置されている。

『スフィア』と呼ばれる、球状の監視カメラだ。全方向に対する監視撮影が可能で、かつてのカメラにあったような視覚は存在しない。それは学校とて例外などないはずだった。

——と、こちらの視線に気づいたのか、「目ざといな」と結莉は

小さく笑った。

「うちの学校は、生徒の自主性を尊重している。監視カメラの類もあまりない。まるでないわけではないが」

「へえ……」

「とはいえ」

彼女は腕につけている朱色の腕章を、もう片方の手でくいと引っ張って誇示しながら、告げた。

「悪さをすれば捕まる。当たり前の話だ。そしてその当たり前を執行するのが、我々の役目だ」

「なるほど」

風紀委員会。確かに、高度情報社会と化した現代では、必要とは思えない活動だ。

もちろん、監視カメラがあつては落ち着かないという人間もいるだろう。ただ、スフィアの記録映像は設置したマスターによる開放キーがなければ閲覧は不可能だし、スフィア自体もほとんど目立たないように設置されているゆえ、そうそう気になるものでもない。

そして最近の機種では、『登録者』として登録されたメンバーであれば、記録のオン・オフを切り替えもできたりもする。とはいえその記録は残るのだが。

よって現代では、問題になることはほとんどない。息苦しいと思うことはあるかもしれないが、言ってしまうえば生まれた時から”そう”なのだ。多くの人は、あまり気にすることもなく一生を終えていく。

「ま、逮捕するような機会は無いに限るが……機甲学校の半分は荒くれた。勢い余って、くだらんことをする連中がないとは言えない」

「そうですね」

教官する一方、心の底でその老成ぶりに感心する。

「今、年寄り臭いと思つたら」

「いや、まったく」

平然と答える。ふん、と鼻息を荒く吐きだしつつも、少女は前へと足を進める。

十分ばかりを、少しの雑談を交わしながら歩くと、かくして職員室へと到達した。

「失礼します」

職員室の扉を開く——今時にして珍しい手動スライド式だ——結莉に倣い、斎も一礼して職員室へと足を踏み入れた。

職員室、と一口に言っても、かつての西暦時代にあったような、紙による書類管理は既にほとんど姿を消している。とはいえ、通常の学校ならともかく、この学校のような機甲学校では、職員室の雑然さは数世紀前から変わっていない。

オフィスにありがちなテーブルの上には、三面型の大型のコンピューターが設置され、机の上には大小様々なメモリー装置やら備品やらが、また違う机には何かの説明書らしき大型の冊子が山積みになっていた。恐らくこれは、停電等の理由で電子機器が全てストップした際に使用する緊急マニュアルなのだろう。

結莉の声に反応したのか、一人の女性教師が、啞えていた煙草を灰皿へ放り投げ、立ち上がるのが見えた。

「おー、御苦労さん、細峯」
「いえ」

近づいてきた教師らしき女性の言葉に、結莉は首を振って答えた。ぽんぽん、とその肩を叩き、教師らしき女性は目線を斎の方へと向ける。

「私は各務紗枝。一応教師をやってる。君の担当ということになるそうだから、よろしく、九桐」

「はい、よろしく願います」

「うんうん、礼儀正しいのはいいこったねー」

しきりに頷きつつも、ほれ、とこちらに差し出してくるものがある

った。

銀色の小型機械だ。サイズとしては名刺程度だろうか。一本の剣と六つの翼を模した校章が、表面にプリントされている。

受け取ると、ずしりとした感触。紙で出来た手帳よりも重い。

そして渡すや否や、「じゃ、私はこれで」とさっさとどこかに行ってしまった。説明も何もない。

思わず視線を彷徨わせると、隣で聞いていた結莉が、はあ、と小さくため息を吐いた。

「それは生徒手帳だ。横のボタンを押せば、ホログラフィックUIを起動できる。登校する時や、火器類を借り出す時に必要になる。

制服の内ポケットにでも、常時入れておけ」

「了解です」

先ほどの教師——紗枝が出て行った方角を見やる。廊下に出て行ったのだが、もうどこにも影は見当たらない。

「……随分と、その……」

「適当な先生だ、か？」

こちらを見ずに、結莉は告げる。まあ、と小さく頷くと、彼女は何度目かの溜め息を吐いた。

「否定はしない……が、一応あれでも優秀なんだ。特に電子機器分野はな。何かと学ぶことも多いだろう」

なるほど、と思う。

電子戦は今や、戦術の中核を成す一柱だ。そのプロフェッショナルというなら頷ける。機甲学校の教師が、生半可な実力で務まるわけもないのだ。

「さて……そろそろ体育館に行くか。もうすぐ式が始まる」

はい、と頷きかけて——廊下に面した窓の向こう、中庭で、数人の男女が揉めているのが見えた。正確にいえば、紅い髪の少女一人

と、それを取り囲むようにした三人の男。

「どうした？ ……む」

こちらの視線を追ったのか、同じものを視界に収めたらしい結莉が、小さく唸った。

ちっ、と小さく舌打ち。

「何をやってるんだアイツらは……」

その声には隠しようのない苛立ちが滲んでいた。

カツカツと廊下を横切つて窓に歩み寄り、一息に開けたかと思えば、窓枠を飛び越えて中庭に降り立った。スカートがふわりと舞うが、気にした様子もない。斎は、若干慌ててその後を追った。

「お前ら、何をしてる！」

大声一喝。ぴくり、と四人全員の肩が震える。だが、そこからの反応は対照的だった。

まず斎から見えたのは、男に囲まれていた女生徒の顔だった。表に出してはいなかったものの、瞳の中には、隠しようもない怯えの色が混ざっている。

彼女は、こちらを視界に収めたかと思うと、少しだけほつとしたような顔をして、次いで強気に眉を吊りあげた。

「離しなさいよっ！」

掴まれていた腕を勢いよく振りほどくと、囲んでいた三人の男を強引なダッシュで振り切つて、こちらへと走つて来んで来た。そのまま、自分たちの後ろに回る。

男たちは、少女を追いかけるとような真似はしなかった。一人はちつと舌打ちして目を背け、一人は明らかに怒りをにじませた目でこちらを――否、結莉を睨んでいる。そしてもう一人、女生徒の手首を掴んでいた男は、こちらを振り向こうとはしなかった。

それらを意に介した風もなく、結莉は一步を踏み出し、口を開いた。

「もう一度問おう。貴様らは何をしている。もうすぐ始業式のはずだが」

男たちは答えなかった。痛々しいほどの沈黙。

たつぷり数秒を沈黙で待ってから、結莉は首を振った。

「黙秘か、いいだろう。話は査問委員会で……」

「それには及びませんよ、先輩」

結莉の言葉を遮って、三人のうちの一人——こちらを振り向いていなかった男が、振り向いた。

至って普通の少年だ。顔は、恐らく平均よりも整っている。どうやら二年生であるらしく、証である赤のワッペンが見てとれた。ただ……薄い笑いを浮かべたその顔は、どうにも齋を嫌な気分にする。……名前は？」

「二年四組の城里です。……彼女とは、ちょっと話をしていただけですよ」

城里、と名乗った少年は、薄い笑みを張りつかせたまま告げた。

「話だと？」

結莉は言いながら、後に隠れたままの少女へと目線を配った。金髪の少女は、強気な目で首を振る。

「嘘です。こいつらはいきなり、私の腕を掴んで……」

「おっと、君こそ嘘はいけないなあ、アンジー？」

大仰な仕草で、城里は肩をすくめた。アンジー、と呼ばれた少女は、ぴくりと形のいい眉を動かすと、結莉に向けていた目線を、城里へと向ける。

「僕は挨拶をしたんだ。でも君は無視をした。だから、腕を掴んで止めただけさ。違うかい？」

「挨拶？ あれが？ どう見たって因縁つけてただけじゃない！」

「でも、それを証明する手段はないだろう？」

その言葉に、アンジーは表情を嫌そうに歪め、その視線で憎悪を

叩きつけた。

「おお、怖い怖い。……でも先輩、分かるでしょう？　僕たちは何も悪いことはしてないんですよ」

「ふむ……」

白々しい、とも言える類の少年の言葉に、思案するように顎に手を当てた。

確かに一見すれば、男三人が寄ってたかって、少女に詰め寄っていたようにしか見えない。とはいえ、少年たちに危害を加える積もりはなかったのかもしれない。

いずれにせよ、判断は難しかった。証明できる第三者がいらないうえ、自分も彼女も、公明正大な裁判官というわけではないのだ。容易に判断できるものではない。

軍隊であつたなら、鉄拳制裁かトイレ掃除を任じられて終わりだろう。

……しかし、軍学校に等しい機甲学校ではあっても、彼らはあくまで学生でしかない。

アーマードは兵器以外にも用いられる。それゆえ、そのパイロットの養成所である機甲学校は、表面上、ただの養成校として済まされる。

これは現在否応もなしに緊張を増している、各国間の関係を考慮した一手だ。しかしその『表面上』という言葉で括るのなら、ここは只の学校、学び舎でしかないことになる。

そして残念なことに、学校という施設に蔓延ることなかれ主義は、西暦時代からまったく変化していないのである。

（確かに、手が出せないな）

斎は頷いた。少年の採った選択肢は、確かに正しい選択肢だろう。通常なら「もういい」で済まされ、何事もなかったかのように過ご

せるに違いない。

ただ、ひとつだけ計算違いがあった。

「……そうだな。なるほど、ではこうしよう」

それは、細峯結莉、この女生徒の性格である。

「これから私は君たちを、委員会の権限により制裁する。私に勝てたら、この場は見逃してやろう」

第二話 機甲学校（後書き）

第二話目更新です。今回は少々推敲が長引いてしまいました。ヒロインその2とその3が登場。次回はようやくロボットじゃないけどバトルです。そしてヒロインその4が登場します。あれ、なんか多くね？

第三話 始業式と面倒事

制裁、という言葉の意味を取り違えるほど、少年たちは愚かではなかった。

構えも取らず、結莉は首を鳴らす。その姿に、城里啓一は小さく舌打ちした。

（これだから、怪力女は……っ！）

ささみゆいり細峯結莉。言わずとしれた”虎の子”風紀委員。正規の風紀委員は学年に二人ほどこが存在せず、そして彼女——細峰結莉は、三年における唯一の風紀委員だ。

純粋な力による学内ヒエラルキーではその頂点とも言える、風紀の鬼。しかしいかにこの女とはいえ、見逃さざるを得ないと思っていた。

（クソッ……！）
毒づく。

大人しく降参するという選択肢はなかった。風紀委員会で査問にかけられれば、待っている結果はひとつだ。自分の輝かしい経歴に、紛うことなき傷がつく。

その回避手段は、既に途絶えたと言ってよかった。

（いや……待て）

そうだ、違う。まだ途絶えていない。

不意に思い至ったその結論に、思わず緩みそうになった頬を自制心で制御しながら、城里は柔和に微笑んだ。

「……先輩。さっきの言葉は嘘じゃないですよね」

「ん？」

「先輩に勝つたら、見逃してくれるってヤツですよ」

そう言くと、彼女は「ほう」と小さく呟き、口を歪めた。

「無論だ。私に勝つたらこの件は不問にしてやる。ついでにまあ、

始業式をサボるぐらいなら大目に見てやらんでもない」

その言葉に、城里は口を歪めた。

無論、敵うと思っっているわけではない。相手はあの細峯結莉なのだ。マトモにやっただって敵いようがないのは、よくよく分かっている。

だとすれば……マトモな方法でなければいい。

目配せ。それまで、揃って怒りと不安と動揺を浮かべていた二人の男は、その意味を余すことなく受け取ったのか、小さく、しかし寧猛な笑みを浮かべて頷いた。

そう、三対一、だ。それは圧倒的なアドバンテージ。

とはいえ、それは向こうも分かっているだろう。分かっているうえで言った条件なのだ。ゆえに——彼は、ズボンの内側に隠していた”それ”を、迷うことなく引き抜いた。

「なに……？」

三人の男が、同時に引き抜いたそれに、結莉は小さく声を挙げた。黒光りする棒きれ。それは、違いようもなく制圧用警棒だ。硬質ゴム性のもので、下手な金属製よりも威力がある、立派な凶器。

「別に、武器はなしだ、なんて言ってませんよね……？」

片手に警棒をぶらさげながら、にやにやとした顔で城里が告げる。

確かに、それは言っていない。無論、三体一であろうことも理解していた。しかししょや、そんなものを持ち出してくるとは、という唇を噛む思いと共に、じろりと三人を見やった。

「……ふん。警棒の携帯は許可されてないはずだがな。他にも色々余罪がありそうだ……」

結莉が呟くと同時、城里が嫌そうに顔を歪めたが、その得意げな

顔は崩れなかった。

しかしこの時点で、彼は一つ失念していた。この場にいることは結莉だけではないこと。即ち、その隣に立つ目つきの悪いガキが参戦してくる可能性を。

そして目つきの悪いガキ、こと九桐^{くどう}斎^{いつき}は、結莉の動揺に気づいていた。

結莉のその表情も、立ち振る舞いも、ほとんど変化はない。しかし微細ながらも動揺している。恐らくだが、単に隠しているだけだ。その理由も簡単に察しがついた。三対一、しかも相手は制圧用の警棒を持っているのだ。間違いなく予想外だろう。そしてその予想外に対応する自信……確信は、恐らく彼女にはないのだ。

(……なら)

この時、既に心は決まっていた。

眼を開き、小さく深呼吸。次いで、後で怯えている赤髪の少女に、肩越しに告げた。

「少し、離れてください」

え？ と少女が問い返す間もなく。三人の男たちが警棒を振り上げながら——結莉へと突進した。

そして、男たちの一歩踏み出した足が地面につくよりも前に……斎の足が、全力で地面を蹴った。

「なにっ……!？」

背後で驚愕の声。それを置き去りに——九桐斎は疾駆した。

一瞬で結莉と立ち位置を入れ替えた斎は、瞬きほどの暇もなく、一番前にいた男の眼前に躍り出る。先ほど長広舌を披露していた優男ではない。隣で立っていた、屈強そうな大男。その片割れだ。

まさに一瞬。互いに突進し合う形となったこともあり、一瞬で彼

私の距離、その間合いを走破した斎は、しゃがみこむような形で男の懐に入り込む。

左足で地面を踏みしめ、身を捻るように――真上に掌底を打ち込んだ。

「ぐえッ……！」

まるで弾丸のような速度で打ち出された掌底が、男の顎を的確に打ち抜く。対して、打ち抜かれた側のダメージは甚大だ。

カウンター気味に、それも顎へのクリーンヒット。斎に伝わる手がたえが、男の意識を確実に刈り取っただろうことを伝えてくる。

男が眼を剥いて倒れこんでいく間にも――斎の目は次の標的を捉えていた。

城里と、その前を走る厳めしい顔つきの男。後者は、幅広の胴周りを持ったこれまた大男だ。ダッシュの最中、二人ともが、一瞬で起きた光景を理解できないまま目を見開いている。

であるなら。無論、このチャンスを逃す手などありはしない――！

地面を右足が捉えたその刹那、着地した右足に強く力を込める。

姿勢は迎撃。大男がそのことに気付いたかどうかは分からない。ただ確実なのは、この一瞬、今の勢いでは容易には静止できないこと。クロス・タイミング。完璧な間合いに男が足を踏み入れた瞬間。

「シッ――！」

短い呼吸と共に、右足で地面を抉り取るように加速。

空中に飛び上がるように疾駆した体のままに、左の膝を男の腹へと叩きこむ……！

「がつ……」

熊のような厳めしい男が体を二つに折る。しかし無論、それだけでは倒せない。相手の体型からして、今の一撃が必要十分なダメージを与えたとは思えない。ただの肥満なだけの男ならともかく、相

手は本物の軍人を目指して日々訓練を積む、いわばプロの卵なのだ。それを理解していた斎は、そのまま地面に着地した右足を起点に、迷うことなく左肘を男のこめかみに突き入れた。

「げうつ！？」

状況把握もできないまま、わけもわからないまま。情けない声と共に、男は地面に昏倒する。

五秒足らずで二名を無力化した斎は、自分のほうに倒れこんでくる男を片手で地面に転がしてから、もう一人——城里へと向き直った。

彼は、未だ呆然としていた。片手に警棒をだらりと下げたまま、もう突進しようという気にもならないのか立ち尽くしている。

「城里さん、でしたか」

「ひっ……！」

名前を呼ぶと、びくうつ、とその肩が大きく震えた。眼が恐怖に震えていた。

やりすぎたか、と反省しつつ、その眼を見かえして斎は言葉を続ける。

「……まだやりますか？ そろそろ、降服をお勧めしますが」

「あ……ぐ……」

何かを呻き、答えようとして——がしゃり、とその警棒を落とした。そのまま地面にうずくまる。

ふう、と溜め息を吐いて……振り返ると、待っていたのは驚きの光景だった。

結莉が、こちらを呆然としたような顔で見つめていた。口をぱくぱくと開閉させ、握った拳の置きどころを探すようにきょろきょろと眼を泳がせている。ここ数十分の間に見た彼女の表情とは全く違うそれに、斎は思わず苦笑してしまった。

——と、その苦笑を、どうやら違う意味に取ってしまったのか。

「……勝てたんだからな」

まるで拗ねたように口をとがらせ、彼女はそう呟いた。

思わず、「へ？」と素っ頓狂な声を上げる斎に、小さく咳払い。

次いで盛大なため息を落とした。

「見事な手際だ、ああそれは認めよう。だが……まったく。お前が片づけてどうする？」

「はあ」

気のない返事に、ますます眉間にしわを寄せて、結莉は斎を睨みつけた。

「いいか？ 風紀委員会以外による制裁は禁止されている。自衛なら別だが、さっきの別にお前が襲われてたわけでもない。要するに、さっきのはただの暴力ということだ」

「……む」

理屈は分かる。そして分かるがゆえに、斎は顔をしかめざるを得なかった。

要約すれば……さっきの行為は、自分の役割を逸脱したものだっただ、ということ、なのだろう。

無論、仕方がなかったという想いもある。あのままであれば、彼女が敗れていたこともありうるかもしれない。まあそれは、彼女の實力を知らないがために断言できることではないが。

「でも、助けてもらったのは事実です！」

ざざつ、と音を立てるように、自分と結莉の間に割り込んでくる影があった。

さきほどの、赤髪の女生徒だ。確か、アンジー、と呼ばれていたような気がする。こちらを庇うように、結莉に対峙している。

「感謝されこそすれ、責められる云われはないと思います！ 彼を査問委員会にかけるといふのなら、私の全権限を賭して反対します

！」

「いや、私も彼を査問にかけるつもりはないよ、アンジェリカ・ロス第二学年長」

そう即答した結莉に、少女は「えっ」と小さく驚く。

「私だって……彼に助けてもらったのは事実だ。今のは少し危なかったからな。まあ、少しだけだが」

少し、の部分を妙に強調する結莉に、思わず苦笑が滲みかけた。

……のだが、視線にあからさまな冷気が混ざり始めたのを見て、寸前で引つ込めた。

結莉の言葉を聞いた少女は、明らかにホッとした表情を顔に浮かべ、胸を撫でおろして斎へと振り返った。

「ええと……助けてくれてありがとう。私はアンジェリカ・ロス。アンジーって呼んで。ええと……」

「九桐斎。俺も斎でいいよ。よろしく、アンジー」

「うん、よろしくね、イツキー」

少女がぱつと花のように笑った。あるいは、先程の強気な態度よりも、こちらの方が素顔なのかもしれない。

改めて見れば——同じ米国人同士を比べて見ても、少女はクリスマスと違った種類の美少女だった。紅色の髪と、オリーブグリーンの瞳、クリスを綺麗だと称するなら、アンジーはまるで香る花のような愛らしさと、健康的な美しさに満ちていた。

お互いに、笑顔のまま握手を交わす。少女の手は、驚くほどに柔らかかった。女性の手なのだ……などと、今更わかりきったことを考えて、柄にもなくドキリとしてしまう。

しかし「柄にもなく」などと無意識に自白したように——純朴さなどというものが自分に似合わないのも、確かに真実なのだろう。わずかな滑稽さと共に、瞬く間に泡のように消えてしまった。

「本当にありがとう。少しだけ……少しだけ怖かったから、助かつ

ちやた。それに――」

「それに？」

問い返すと、少女は頬を赤く染めて俯いた。

「ごによごによと囁くような声が聞こえたが、その明確な意味までは届かない。彼としては首を捻るほかなく……不思議な顔をしている齋に、アンジーは焦った風に「何でもない」と手を振った。

――と。唐突に、二人を見ていた結莉が、横合いから「あ」と声を上げた。

しかしその間抜けな声を馬鹿にすることなど、当然誰も出来るはずがない。なぜなら、その視線を追った齋とアンジーも、同じようなものだったからである。

視線の先は校舎に架けられた時計。中庭から見えるそれは、既に九時五分を示していた。

「まずっ、始業式！？」

しまった、という思いは全員同じだったのだろう。齋が声を上げるまでもなく、アンジーは焦ったように声を上げた。

現代のセキュリティは堅牢である。それは学校であつても例外ではない。そのような昨今、始業式のような行事が始まれば、体育館は施錠されるのが常である。

当然、教師に言えば鍵を開けてはもらえるが、それが少々ばかりややこしいことであることは間違いもなく。

「あー」

困ったな、と苦笑気味に結莉が頬を掻いた。

「わかった、仕方ない。今回は二人とも、風紀委員会の仕事に付き合ってもらった、ということにしておこう。減点対象にはならないようにはなるはずだ」

ただし、と結莉は付け加えた。

「君の罪を免罪には出来ないぞ、九桐くん。とはいえ、もちろんそ

のまま裁くつもりもない。安心して、放課後生徒会室に来るように」
いいな？ と念を押されれば、うなずく以外の選択肢など取れようは
うはずもなかった。

面倒なことになった、と思う。

一つは親切心であった。そしてもうひとつは自衛のためだった。
より正確に言えば、前者は三、後者は七ぐらいだろうか。

いずれにせよ、あのときにしたことは後悔してはいない。ただ結果として、今自分は生徒会室の扉の前で、面倒臭そうにため息を吐いている。それは事実だ。

（安心して、といわれてもな……）

先ほどの言葉を思い出す。

あの後「三人を連行する」と言った結莉に付き添って、とりあえず二人を医務室に、一人を風紀委員会にまで連れて行った。

そして気が重いままホームルームに向かい、三十分後には解散。
今日一日は始業式とホームルームによる説明だけで、他には何もない。

しかし、斎はそのまま帰路につくことは出来なかった。

風紀委員である彼女——細峯結莉の言葉を、そのまま知らない顔で無視することが出来るわけもないのだ。何せ、いわば風紀委員会は
この学校における警察、そしてその委員からの言葉ということは、
警察署からの出頭命令にも近い。無視すれば、どんなペナルティが
待っているかもわからない。

そんなこんなで——斎は、「少し待っていてください」という生徒会役員らしき女性の言葉どおり、ドアの手前にある壁掛け式の椅子に腰掛けていた。

ドアの向こうで、今も何かが話し合われているのは空気でわかる。それが自分のことだと思えば、殊更気も重かった。

「ごめんね、こんなことになって」

斎の溜息に気づいたのか、隣に座る紅い髪の少女——アンジェリカ・ロスことアンジーは、申し訳なさそうに顔を歪め、俯きながら言った。

……もとより、生徒会室に呼びされたのは斎一人だけだ。当然、彼も一人で行こうとしたのだが、どうしてもついてくると言っただけで聞かなかった。

別々のクラスならば容易に断れたのだろうか………という因果なのか、アンジーと斎のクラスは同じ二年六組だった。

「いや……あれは俺が勝手にやったことだから」

少女の謝罪に首を振ると、アンジーはふっと柔らかく微笑んだ。

「……やさしいね、キミは」

斎にとって、それはまったくの嘘偽りない真実であつたのだが、そう言われてしまえば返す言葉もない。

言い訳を重ねたところで、残るのは無様だけだ——かつて師に言われた言葉を思い出す。重要なのは、自分の起こした行動が、誰かにとつての災いにならないように全力を尽くすことだけだ、と。

——ピピ、とドアのロックが解除された電子音と共に、ドアが小さく横にスライドした。

半分ほど開いた扉の向こうから姿を現したのは、小柄な少女だ。可愛らしい、という形容が最も似合いそうな、そんな少女である。しかしその相貌とは裏腹に、その目には冷静で冷徹な光が垣間見えた。

先ほど、斎にここで待つように告げた、生徒会役員らしき女生徒だ。

「……九桐斎さんですね。お入りください」

見やるや、無表情なままに斎を招いた女生徒は……ちらりとアンジーへと視線を向ける。

「あ、あの……私——」

「彼だけで結構です」

にべもない。少女は、隣で立ち上がろうとしたアンジーを、機先を制する形で無表情に遮った。

しかし、それは仕方ないことなのかもしれない。師の言葉に照らせば……彼女もまた、自分の責で他人に害が及ばぬよう、努力しているだけに違いない。

しかしこの問題は、結局のところ斎一人が、斎一人の責任で引き起こしたがゆえに。その厚意に甘えるつもりは、元よりない。

不安げな顔で斎を見るアンジーに手を振って、一礼の中に溜息を隠しながら、彼は生徒会室に足を踏み入れた。

生徒会室は綺麗に整頓されていた。

円卓を模した巨大な机がひとつと、奥に、生徒会長の席らしい個人テーブルがひとつ。他にも、普通の学校で考えれば、豪華すぎるような設備がいくつも散見された。

機甲学校における生徒会長の権利は、時に教師をも凌ぐ。その意味を誇示するかのごとく、学長のような席に悠然と腰掛ける一人の女生徒。

眼が合うと、ウェーブのかかった長いブロンドの髪の下で、彼女は優しく微笑んだ。彼女こそがおそらく、全校生徒による熾烈な競争を潜り抜け、その頂点へと立つ人物なのだろう。その物腰には、他の生徒にはないような余裕が感じられた。

「はじめまして、君が九桐斎くんね。私は生徒会長の四方院楓。よろしく」

「はい、よろしく願います」

頭を下げると同時に……。

その優しい声聞きながら斎は、自分に対する方針は、そう悪いほうに転んではいけないのかもしれない、と感じた。悪い話ならば——誰であれあるはずの硬さが、少女にはなかった。

「さて、まずはじゃあ全員の自己紹介から……」

「会長。そんな時間はありませんが」

と、冷静に口を挟んだのは、先ほど見た小柄な少女だ。

全員、というのは無論、この部屋にいる全員、ということだろう。広い部屋に置かれたデスクには、七、八人の男女がめいめいに腰掛けていた。確かにここにいる全員が自己紹介するとなれば、それなりに時間がかかるだろう。

「えー、いいじゃんそれぐらい」

ぶーぶーと口を尖らせる生徒会長——四方院楓に、対する少女は無表情に首を振って即答した。

「よくありません。今日は始業式でしたから、閉館も早い。もうあまり時間ありません」

むっ、と頬を膨らませる楓に……ふと、椅子に座っていた生徒たちのうちの一人が、声を上げて笑った。

茶髪を長めに伸ばした、軽薄そうな印象の優男だ。青の校章^{ワッペン}……即ち、一学年上の先輩だ。

「はは、いいじゃん自己紹介。どうせこれから一年間も一緒なんだし?」

「……私も構わないが」

次いで首肯したのは見知った顔、結莉だ。

二人の言葉に、女生徒は、無表情ながらも小さくため息を吐いた。「まったく……春寺さんだけでなく細峯さんまで」

春寺、と呼ばれた男子生徒は、変わらず軽薄な笑みのまま、大仰

に肩を竦めた。

「そう言つなよ。その目つき悪いボウヤさ、二年の三人組……しかも武器持ちを、たった五秒で片付けたんだろ？ 興味あんだよ、俺もさあ」

「……それは、俺も同感だ」

横合いからの同意の声。

そちらを見れば、眼を瞑り、両手を組んで椅子に腰掛ける男がいた。大男というわけではなく細身だが、研ぎ澄まされたその気配は、まるで一本の刀のようにさえも感じられる。

「……だが、俺が興味あるのは真実だけだ。名前も経歴も、今はどうでもいい」

変わらない姿勢のまま淡々と語り終えると、片目だけ開いて斎を見やった。

「……二年。今一度問うが……先ほどの件、真実か？」

先ほどの件、というのが、先に話題に上がった、五秒で片付けた云々のことであろうことは想像に容易い。

斎は頷き——ただし、と付け加えた。

「あれは相手方の油断をついた、いわば不意打ちです。十分な準備をされていれば、武装した三名を素手で無力化するのは、難しかったと思います」

「つまり、相手が油断していたから？」

「ええ、でなくば無理だったかと」

口を挟んだのは、春寺、と先ほど呼ばれた軽薄そうな先輩の方だった。斎の言葉に頷くと、彼は結莉のほうへと振り返った。

「だってよ、細峰。その辺どうなん？」

話を振られると、結莉は「ふむ」と腕を組み、わずかに考え込む表情をして、首を振った。

「……確かに容易くはなかったかもしれない。が、不可能ではなかったと思う」

「買いかぶりですよ、先輩。あれはたまたま上手くいっただけで……」

図らずも言い合う形となった二人を引きとめたのは、二度ほど響いた、手を打ち合わせる音だった。

「はいはい、皆さん。勝手に話を進めないの」

呆れた風に告げたのは、議長という体裁を取る生徒会長——楓だ。二人は口をつぐみ、互いに彼女へと向き直った。

「さて、じゃあ自己紹介はとりあえず置いておいて。まず、斎君にひとつ聞きたいんだけど」

「はい」

頷くのを確認すると、こちらの様子を伺うように、彼女は口を開いた。

第三話 始業式と面倒事（後書き）

ロボットなのに生身バトル。デュエルしろy（ry
ロボットバトルは……二話ほど先の話になりそうです。
しかし、またもや中途半端な形に……！
申し訳ない限りなので今回は一週間後に更新します。
ということ、第四話は10月30日に更新です。

第四話 生徒会

「どうして、あの件に手を出したのかしら？」

「……どうして、ですか？」

ええ、と楓は頷いた。生徒会長のデスクに置かれた資料を、一枚めくる。

「状況は聞いてるわ。確かに、危ない場面だったかもしれない。貴方が手を出さなければ、結莉も何か、怪我の一つだってしてたかもしれない。でも」

そこまで語って、彼女は一呼吸を置いた。斎の目を覗き込むようにして、続ける。

「貴方は、どうして彼女を助けたのかしら？　だって、相手は武器を持つてるのよ。しかも三人。他にも、助けを呼ぶとか、逃げるとか、あったでしょう？」

「……それでは、意味がなかったのよ」

斎は頷くようにして、続けた。

「助けを呼んだところで、細峯先輩が怪我を負う可能性はありました。あるいは、何事もなく制圧できたかもしれませんが……僕は先輩の実力を伺ったことがなかったのよ」

「まあユイなら、三人ぐらいは平気だと思うわ。ただ……貴方の言うとおり、ちょっとばかり軽く怪我をしたかもしれないけど」

ふうん、と頷きながら、楓はペンを走らせていく。

「逃げるという選択肢は最初からなかった、と。……なるほどね。そこがユイの評価するワケ、か」

ユイというのは、恐らく細峯結莉のことを指すのだろつ。そう思

いつつ、斎はただ黙って聞いていた。

恐らく彼女は、助けられたというフィルターによって、自分を過大に評価しているのだらう……と、斎はそう思っていた。

実際、あの程度のことは、ある程度訓練された人間ならば難しくない。ここは機甲学校であるわけだし、目立つほどのものではないはずなのだ。

——などと思いを巡らせていると、ペンを走らせ終えた楓が、改めてこちらに向き直った。

「それじゃ、次ね。さっき、貴方をどうするか、一応私たちで話し合っただけだ」

と話しつつも、楓は結莉へと目を配る。その目線の向こうで、結莉は小さく頷いた。

「私からの要望はひとつだ。斎、風紀委員会に入れ」

「へ？」

わけがわからず、結莉と楓の間で、斎は視線を往復させる。

そんな様子に、楓ははあ、とため息を吐きながら、肩を竦めた。

「……まあ、こんな調子でね。風紀委員会は成績上位者しか入れないから、転入してきたばかりの彼には無理、って言っても聞かなくて。第一、二年はもう二人もいるじゃない」

「もともと、そんなものはただの慣習でしかないだらう？」

ふん、と鼻息も荒く胸を張ると、楓は困った風な、あるいは呆れたような——それかもしれない、微笑するような、そんな複雑な顔で小さく笑った。

「で、私たちは反対。生徒のほうから不公平だ、って文句が出かないから」

「ちなみに、俺も反対ね」

さっと手を挙げて意思を表明したのは、春寺とかいう、例の軽薄そうな男だった。

それに、結莉が片眉を挙げて反応する。

「貴様、確かさつきは中立と言ってたろう」

「いやー、まあ、とはいえさ。風紀に人が余ってるのは確かなわけだし？ 足りてるのに追加する理由は特にないし？」

わざとらしく肩をすくめる春寺に、楓は「はあ」と小さくため息を吐いた。

「ひじりん」

「ヤー」

楓が何者かの名前を告げる。と、春寺の隣に座っていた、なぜかメイド服姿の女性が即座に首肯して、椅子に立てかけていた日本刀に手をかけた。

反射的に春寺が反応し、立ち上がろうとする。だがそれよりも早く——音もなく抜刀したメイドが、その首元に白刃を押し付けていた。

「ちゃんと理由を話さないと首チョンパですよ、部長」

「ちょ、まつ、嘘、嘘です！ 話すからやめて食い込ませないで銃

刀法って知ってる！？」

「ひじりん」

再び声をかけられ、今度は一瞬躊躇してから「ヤー」と応答。そのまま、再び刀を納め、元の席へと戻っていく。そして最後に、「

……ちっ」と舌打ち。

「今『ちっ』って言ったよこの子！？ もうやだ怖い！ ボクお家に帰りたい！」

「お前が素直に話さんからだ。ふざけてないでさっさと話せ」

青くなつた春寺に、容赦なく結莉が追撃し、次いで浴びせられたその破壊力の籠った視線に、降参とばかりに両手を挙げた。

「あー、あれさ。最初は興味なかったんだけど、実際見てみるとね。ちよっと面白いと思って」

「なに？」

「要するに、執行部で使いたい、ってこと？」

疑問符を浮かべた結莉に代わり、指を立てて結論を言つてのけた楓に、春寺は「そゆこと」と首肯した。

「しかし……なら、風紀委員会と執行部の兼任なら——」

「いや」

と、首を振つたのは、例の刀のような雰囲気を纏つた男だった。

「……風紀委員は、生徒会の役員にはなれん。これは校則で定められている。生徒会長といえど覆すことはできない。そういうことだな」

と、未だ腕組みの姿勢を維持したまま、静かにそう告げた。と、この場にいる半数近くが、驚いたような顔をして、春寺へと視線を集中させた。

「そうだったのか……」

「それは、知りませんでした。……よくご存知でしたね、春寺さん」

前半は結莉、後半は、例の無表情な小柄の少女だ。褒められた側は「いやあ、褒めてもなにもでないよ」と手をひらひらさせていた。

「まあ、前例がないことだしね。ついでに言えば、風紀委員は他の役職に関しても、兼任することはできないわ」

と、苦笑しつつ付け足したのは楓だ。

まあともあれ、と楓は首を振った。

「風紀委員にせよ、執行部にせよ同じことよ、春寺君。まあ分かつて言ってるんでしょうけど……第一」

と、斎の方を指差して。

「彼のことを、まず尊重すべきじゃないかしら？」

その言葉に、全員が押し黙った。「むう」やら「確かに」「やらの呟きが聞こえ、次いで、斎へとその視線が集中する。」

つまるところ、こういうことなのだろう。風紀委員会に入れ、という結莉と、それに反対する——恐らくだが、この学校での重要な役割にあるであろう、生徒たち。

面倒なことになった、と斎は思った。目立つつもりなどなかったのだ。いや、正確に言えば、目立ちたくなかったのである。

しかし結果として、これだ。

自分を、ごく普通の生徒、などと自信を持って発言できるだけの経緯を、持っているわけではないのも確かだ。が、しかし、そういう風に過ごせるとは思っていた

さる友人が聞けば、「そりゃア……お前エ、無理つてもんじゃね？」などという言葉が返ってくるのは間違いないであろうが。

「……先輩」

そんな自分の本心を押し隠したまま、言葉を紡ぐ。

「自分の選択によって、自分や……他の誰かに、何らかのペナルティが課せられることは？」

「ないわ」

楓からの返事は、即答だった。

「たとえ断ったとしても、貴方や、他の人に対する圧力やペナルティなんてものは、一切ありません。そしてさせません。それは私、生徒会長である四方院楓の名に掛けて誓います」

「そうですか」

その言葉は誠実だった。信用できる、と思った。

分かる——これは嘘でも、その場限りの言葉でもない。生徒会長としての名に相応しい、確かな誠実さだ。

で、あるならば。

「なら、俺は——」

自分の本心を、迷わず告げるべきなのだろう。

——かくして、帰り道。

談合を終え、生徒会室を出た斎は、その場で待っていたアンジーと合流し、下校の途へと着いた。閉館の音楽が流れ始めた校舎へと背を向け、校門へと向かう。

そこには誰の姿もなかった。どうやら、クリスは先に帰ったのだろう。

彼女はあまり、家を長く空けてはいられない立場の人間だ。ここで自分を待っているわけにもいかない。そう思えば、疑問もなかった。

「あの……」

おずおずとかけられた声に振り向く。アンジーが、こちらを見ながら、もじもじと両手の指を重ね合わせていた。

無論、生徒会室から出たときに「問題なかった」ということは既に伝えてある。というよりも、出てくるなり心配顔で見つめられれば、そう答えるより他にもなく。

事実、大丈夫ではあった。学校生活に支障はないだろう。ただ、細峯先輩には悪いことをしてしまった……などと斎が考えていると、目の前の少女が、何を思ったか、いきなり頭を下げた。

「今日は本当にありがとう、イツキ。何から何まで、私は迷惑をかけたばなしで……」

その声色には、どこか苦悶が滲んでいた。恐らく、ずっとそればかりを考えていたのだろう。

悪いことをしたな、と思いつつ、斎は首を振った。

「いや。前も言ったけど、俺のやったことだから。迷惑なんて思っていないよ」

出来る限りの平静さと優しさをこめた声で言うと、「そっか」と顔を上げて、ようやく彼女は微笑んだ。

再び、並んで歩き出す……と、アンジーが、不意に斎の顔を覗き込むように、前に先回りした。後ろ歩きで進みながら、尋ねてくる。

「そうだ。イツキはさ、どうしてここに來たの？」

「どうして？」

再びアンジーの顔を見つめると、アンジーはむず痒そうに頬を掻いた。

「んーとね……そう。パイロットになろうと思った理由。イツキも、ドラグーンのパイロットになろうと思ってここに來たんでしょ？」

「……まあ、ね」

ドラグーン・アサルト。かつて開発され、現代の主力でもある、人型駆動兵器のことだ。多くの人間は、このドラグーンに憧れ、パイロットになるべく日夜の訓練に励む。そのための養成学校が、この機甲学校だ。

かつてファンタジーでしかなかった人型兵器は、今や宇宙最強とすら目されているのだ。若い少女たちであるのなら、ある意味、憧れても当然なのかもしれない。

しかし、ただの憧れだけで、歩き続けることは出来ない。夢を叶えたところで、所詮、それは殺人のための兵器ではない。夢を追う彼らは、人殺しのための技術を、その牙を、ただ磨き続けてきただけだったと気づくときが、必ず来る。

……それでもなお続けるとすれば。それは、彼らがなぜパイロットを目指したのか、という理由だ。機甲学校に入るほどの厳しい訓練と試練を通過した少女少女たちの、その原動力。

ただ。それが自分にあるのか、と聞かれれば、それは微妙なところだった。

「……そうだな。それが必要だから、かな」

必要だったから学んだ。必要だったから見につけた。

言われてみれば、ずっとそんな人生だ。

「そういうアンジーは？ どうして機甲学校に？」

んー……と頬に手を当てたアンジーは、少し悩むようにして、言った。

「ライトニング、って知ってる？」

ぴくり、と斎の眉が動いた。

ライトニング。あるいは、シリウス・ワン。

「……知ってる。むしろ、パイロットを目指していて、知らない人の方が少ないんじゃないか？」

——かのG・U軍^{アメリカ}の持つ、最強のエースパイロット『シリウス』。そして、シリウスの駆る機体の名こそ、かの『ライトニング』だ。憧れる人間は、少なくない。彼女もきつとその一人なのだろう。それ以上を聞き出すことは出来なかった。なぜなら——

「お、さっきの二年じゃないか」

背後から声に、唐突に呼びとめられて、斎とアンジーは足を止めた。

振り返れば、そこには春寺、と呼ばれた軽薄な印象の先輩が立っていた。

ただその印象も、さっきの一事で大分修正しなくてはならないかもしれない。軽薄なだけではない、という風な感じで。

「……なぜか妙に罵られたような気が」

「いや、気のせいですよ先輩」

「そうです、気のせいです部長。罵りの一つや二つ、気にしてはいは身が持ちませんよ」

と、斎の言葉の後に続いたのは、例のメイド服姿の女性だ。

前から思っていたが、なぜメイド服なのか。そしてなぜ片手に刀

を提げているのか。無論メイド服なので、服装から学年を類推することは出来ない。

女性は、おしとやか、という言葉がまさしく似合うであろう笑顔で続けた。

「不肖、この鹿堂聖、いつも部長のことを心で小馬鹿にしております故」

「ひどいつ！？」

「あ……相変わらずですね、お二人とも」

と、二人の漫才一（？）に口を挟んだのは、隣のアンジーだった。どうやら、この二人とは知り合いのようだ。

「おや、アンジーちゃんじゃない。お久しぶりー」

「お久しぶりです、アンジェリカ様」

「せ、先輩！ 後輩に様付けはやめてくださいって言ってるじゃないですか！」

あわてたように、メイド服の女性を止めにかかるアンジー。

しかしそれをすらりとかわし、まさに本物のメイドのごとく丁寧に腰を折る。

「しかしこの間、代案として用意させていただいた『アンちゃん』や『アン坊』といった愛称はお気に召さなかったようですし」

「普通に呼ぶって選択肢はないんですか！？」

思わず突っ込んだアンジーに、ふるふる、と首を振るわせるメイド服。

「そんな、恐れ多い！ アンジェリカ様を呼び捨てにするなんて……」

どうやら、呼び捨ては駄目でもアン坊はオーケーらしい。

なんとなしにその状況を見守っていた斎に、春寺が「ああそうだ」と思い出したように言った。

「そっぴや、自己紹介もまだだったな。俺は生徒会執行部部长、春

寺嵩だ。んで……」

春寺が示すと、未だアンジーと戯れていたメイド服の先輩が、こちらを振り向いて一礼した。

「私は生徒会執行部副部長、鹿堂聖と申します。よろしくお願いいたします」

「生徒会執行部……ですか？」

どうやら生徒会とはまた違う組織らしい。耳慣れない言葉に、思わず斎も聞き返す。

「ああ……転校生じゃちょっと分からんか。えーと、まあ簡単に言えば……聖」

と、傍らに立っていたメイド服の少女に声をかけると、はい、と小さく頭を下げ、少女が説明を開始した。

「生徒会は、三つの組織に分かれています。中心組織である生徒自治委員会と、生徒会役員の任免権限を持つ二つの組織。この二つの組織が、生徒会執行部と生徒会調停部です」

なるほど、と思う。

生徒による自治を尊重するがゆえ、生徒会に与えられる権限が絶大なものであろうことは、容易に想像がつく。

だが絶大なだけでは暴走するがゆえに、対立する三局によって運営する、ということか。

要するに三権分立の考え方だ。この学校独自のものなのだろう。

「つつても俺らは端役だからね。大して人材も集まらない割りに、面倒な仕事を押し付けられもする。要約するに、絶賛役員募集中、なんだけど……」

と、春寺はアンジーの方に視線を向ける。しかしアンジーは、少し顔をしかめて首を振った。

「すいません、先輩。私に、そのような重役は向いていませんので……」

「うーん、残念。アンジーちゃんなら申し分ないんだけどなー可愛
いし。唯一、俺と聖の意見が合った人材なんだけどなー」

薄ら笑いと共に言った春寺に、冷たい目線を寄越すメイドこと聖。
「意見が合わないのは、いつもいつもいつも顔で選んでるからじゃ
ないですかね駄目部長」

「そーそー、だから顔も能力も完璧なアンジーちゃんがいいなー僕
は」

懲りた様子もなく肩を竦める春寺に、聖はため息を落とす。

と、「そうだ」と何からひらめいたのか、両手を打ち合わせた春
寺は、斎へと振り返った。

「じゃあさ、斎くんはどうか、執行部。斎君が入ってくれちゃっ
たりしたら、アンジーちゃんも入ってくれないかなー？ なんて」

「……そちらが本音だろう、貴様。相変わらずの狡さだな、シユウ
と、この声は、春寺の背後からだった。

うおっ、と春寺が飛び退る。アンジーも、聖もまた、驚いたよう
に眼を見開いていた。

それもそうだろう。先ほどまでまるで気配がなかった。ここまで
近寄るのに、この場にいた誰もが気づかなかったのだ。

例の無口な、斎をして刀のようなと評した男性だった。相変わ
らず、まるで切れそうな気配を纏いながら、斎へと視線を向けてく
る。

「って、タツかよ。ビビらせんな、ったく」

「油断している方が悪い」

タツと呼ばれた少年は、あっさりとそう断じ、斎の前へと進み出
た。

そのまま、じつと斎の目を覗き込んでくる。後ろで春寺が「男同
士見詰め合っても気持ち悪いだけ」なんて騒いでいたが、それを気
にする様子もない。

「……気づかれていたか」

「何がです？」

謎の呟きに返せる言葉も当然なく。素っ頓狂な返事をする斎に、ふつと彼は微笑んだ。

「……ふん。なるほど、面白い男だ」

「はあ……」

彼は、そのまま握手を求めるように片手を伸ばしてきた。

「……俺は東郷龍平。生徒会調停部部长を務めている。好きに呼んでくれて構わん」

「はい、よろしく願います、東郷先輩」

男同士握手を交わす。と、横合いから、春寺が声を上げた。

「ところでタツ、今日はゆーりんどうしたの？」

ゆーりん、とは誰のことだろう、と斎が思っていると、隣にいたアンジーが「調停部の副部长」と耳打ちしてきた。

「……上谷なら、もう帰ったはずだが」

「もう帰ったのか……相変わらずパワフルだなあ、あの娘」

「……ああ。今日の集会についても、話を聞いていたか微妙なところだ」

「あー、まあ、あの子は細かい話、頭に入らないからねえ」

あつはつは、と朗らかに馬鹿判定された上谷何がし氏であった。

そういえば、一言も口を挟まず、ぼうつと虚空を見ていた女性がい
たような……いなかったような。

「恐らく悠里様は、夕食について思いを馳せていたのではないでし
ようか」

メイド服姿の聖が、優雅な仕草で人差し指を立ててそう告げた。
なるほど、それで大体の人物像はつかめたような気がする……。

「……そもそもにして、だ。彼は既に、執行部入りの申し出を断っ
ているはずだが？」

「いーんや、こいつが断つたのは風紀委員会行きで、執行部行きは断つてないもんねー」

どこからどう考えても子供の理屈であるのだが、臆面もなく断言されると、あっさりと断りづらくなってしまう。「なあ？」なんて話題を振られると尚更だ。

「……まったく。四方院に眼をつけられなくてはダメだ。それ以上は、奴が出張りかねんぞ」

「うげ……。会長ちゃんは、怒るとマジで怖えからな……」

若干顔を青くした春寺は、降参、という感じで両手を上に挙げた。

ふと、東郷は二、三步前へと進むと、肩越しに斎を振り返り、告げた。

「……調停部に入りたければ、いつでも俺に言え。お前なら、いつでも歓迎してやる……」

そうとだけ告げると、もう振り返ることもなく、まっすぐに去って行った。

ひゅう、と春寺が口笛を吹く。

「珍しいこともあるもんだねえ。へえ……」

「珍しい、ですか？」

問い返すと、春寺はふっと微笑み……斎の背中を、ばんつ、と全力で叩いた。

「お前には期待してるってことだよ、ルーキー！」

第四話 生徒会（後書き）

なんだかぶったぎりな感じでごめんなさい。とりあえず第一幕、ということで。次幕では、ようやくロボットことアーマード・アサルトが出てきます。

HPではTIPSクリックシステム（単語をクリックすると説明が出る）というのをやってます。現在、41個ほど作ってますので、気になる方はそちらもどうぞ。ただ、まったく読んでなくても分かるように頑張りたいと思ってます。

10/31 今更ながら、風紀委員会の設定を変更したのを忘れていたので修正しました。

第五話 紅

アーマード、というものがある。

その言葉は現代宇宙において多く用いられるものであるが、定義としては簡単なものだ。

重力圏内外を問わず、継続的な航行、及び大気圏突入が可能な装置。しかし、その範囲はあまりにも広範に過ぎる。よってそれらは用途別に、三種に大別された。

すなわち、アサルト モービル軍用、輸送用、クラフト工業用である。

この中でも軍用は、さらに人型、ドラグーン タクティクス空母型、エアネスト航空型に分類されるわけだが……閑話休題。

キャプテン・チエンバースは苛立っていた。

キャプテンといっても、彼の船はあくまでもアーマード・モービル、輸送用の小型船でしかない。それも旧式だ。

TNF-337 タイラント。

開発されたのは今から四十年以上も前で、購入したのは二十年以上も昔の話だ。しかし未だに必要十分なパフォーマンスを発揮するし、正直、これだけ乗り続けていれば愛着もわく。

彼が苛立っているのは、別に船が旧式だからではない。今回の仕事について、だった。

(……荷物の中身は話せねえし、覗くのも許さねえだと？ くそつ、舐めやがって……)

運び屋は信頼が命だ。

今から何十年も前に、自分を運び屋として育て上げた父親が吐いた言葉だ。信頼を築けば、信頼できる仕事先から仕事来る。それをこなしていけばいいだけなのだと。

かつては反発した。それでは食っていけないと反論した。個人業

の運び屋は、いつも食い詰めるか食い詰めないかのギリギリのラインで仕事をしているのだ。燃料費だって馬鹿にならない。

ただ、それから何十年も経った今になって——今更、その言葉の重さが身に沁みていた。

（ああそうさ、金に釣られちまった俺が馬鹿だったんだ！ クソツ……）

今でも、我が愛船の格納庫には、正体不明の荷物と、仕事先が無理やり押し付けてきた護衛とやらが乗っている。

ただ、分かってもいた。奴らは監視なのだ。もし自分が荷物の中身を覗こうとしたとき、真っ先に撃ち殺すための。

ちっ、ともう一度舌打ちし、周辺の宙域を探查するレーダーを凝視した。

実のところ、一番怖いのは宙域警察なのだ。もし職質を掛けられて、荷を改めでもされたら、とぞっとする。

用途によって分けられる、アサルトやモービルといった三種。

あくまでも大別する理由が用途であるので、たとえ純粋な輸送機として開発されたとしても、軍用に使われれば、それはアーマード・アサルトという区別になる。たとえ武装のひとつも積んでいなかったとしても、だ。

だから、たとえば。

今自分が積んでいるコンテナの中身が、武装したアーマード・アサルトであつたなら。憎たらしいことに、この船はアーマード・アサルトという分類になってしまうわけだ。

無論、アーマード・アサルトに搭乗するには、特別な免許がいる。それだけではなく、中央政府による運用許可証も必要だ。それがなければ、良くて免許剥奪……悪くて数十年単位での禁固刑。

もちろん、乗せた側もただで済むはずがない。だがそれでもなお、

国に黙って兵器類をどこかに輸送しようという輩はいるものだ。かつてそういったことに巻き込まれ、何の罪もないのに投獄された人間を、自分は少なからず見てきている。

当時は、自分には絶対にありえないと思っていたが、今となっては笑えないジョークだ。

ただひたすら警察機が現れないように内心で祈りつつ……不意にレーダーが立てた、ピッ、という小さな電子音に、彼は席から飛び上がった。

まずい、やばい、どうする、なんで——と思考が高速で回転しながら、どうしようもない言葉ばかりを紡いだ。

一通り混乱し、床に転んでのた打ち回る。ごんっ、と頭を勢いよくぶつけてから……待て、と、チェンバースは動きを止め、眼を閉じた。

冷静に考えれば。あれがもし警察の機体で、こちらを目標にしているなら、まず最初に警告があるのではないか？

起き上がり、もう一度レーダーを覗き込む。そこには確かに、機体の存在を示す赤い光点が写っていた。レーダーを指で叩き、詳細を出す。

(……識別信号を出してない？)

少なくとも、こちらには届いていない、ということになっている。だがそれはおかしい。レーダーが届く範囲なら、間違いなく識別信号も届くはずだ。

そうこう考えているうちに、機体は刻々とこちらへと近づいていく。

だが識別信号はなく、こちらへの呼びかけもない……となれば。

(まさか……海賊か？)

ぞくり、と嫌な冷気が背中を撫でた。

出会ってはいけない連中。海賊。あるいは界賊とも呼ばれる。

この広い宇宙において、通りがかる商船を襲い、金品を強奪し、そして乗組員を殺す。そういった、いわゆるすべてを奪っていく類の連中だ。

その存在が許されるはずもない類の連中だったが、何せ宇宙は広い。その根絶も発見も至難の業だ。

だが、と、チェンバースは思い返した。

（そうだ。こういうときのために、奴らがいるんじゃないか！）

通信チャネルを格納庫に合わせ、チェンバースは二度深呼吸をして……通信スイッチを押した。

「俺だ、チェンバースだ。……海賊が出た。あんたらの出番だ」

『あ？　なんだって？』

「だから、海賊だ！　奴らが出たんだよ！　さつさとやってくれ。

これがあんたらの仕事だろう！」

まったくもって。でなければ、こんなクソ共を、俺の愛船の格納庫に入れておいてやる理由なんてまるでない。

『オーケーオーケー、分かったよ、どなるなって』

『ハハハハ、言ってやんなよマーク。おっさん、ビビってるだけだつて』

『オーウ、こりゃ失敬』

回線の向こうで、がはははは、と笑う声が聞こえる。くそつ、と向こうに聞こえないように舌打ちしてから、リーダーを手で操作する。

「今から位置情報を送る。あんたらは今すぐ出てくれ」

『オーケー。ま、タダ働きつても面白くねエしな』

『よっしゃ、おっさん！　ボーナス弾んでくれよ！』

「……分かった。それは帰ってきてから話そう」

チェンバースの言葉にひとしきり連中が笑うとほぼ同時、位置情

報の転送が完了した。

ちくしょう。海賊なんぞ現れなけりや、あんなクソどもに笑われずに済んだのに。ひとしきり心の中で悪態をついていると、内線の向こうから声が聞こえてきた。

『全員、準備完了したぜ。おら、ハッチ上げてくれ！』

「了解。幸運を祈るよ」

苦虫を噛み潰し、心の片隅にも存在しないセリフを吐いてから、チェンバースはハッチの開閉ボタンを押した。

三機のドラグーンがハッチから降下し、スラスターを始動させた。距離をとっていなければ、その熱量でモービルが溶けてしまう。

だが荒くれの傭兵である男たちにとって、そんなことは些事ではなかった。

一気に加速し、目標との距離を詰める。

『いやー、クソつまんねえ仕事になると思ったんだが、ラッキーだったな』

「まったくだ。ストレス発散に、思いつきりやるか」

などと言い合いつつも、レーダーに機影が映る。ふとその機影に、思わず眉をしかめた。

（ドラグーン、一機だけだあ？）

どういうつもりなのか。確かにただのモービルならば、ドラグーン一機で十分に叩き殺せるだろう。だが……

（運がなかったなあ、ド素人）

にやり、と笑みを浮かべる。そして彼は、眼前にあるドラグーンを蹴り殺しにすることに決めた。

自らの機体、L4 ハルベルド は、デイビットアームズテクノロジー社製の第二代ドラグーンだ。それが三機。これなら、たと

え第三世代であろうと捻り潰せる。

そう思いつつも、さらに機体を加速させる。音速を優に突破した三機は、あっという間に彼我の距離を詰め、目標を視認距離にまで収めた。目標は動かない。

さらに距離を積み——そして、射程圏内へ。

「もらったア——」

減速。照準。一連の動作によってドラグーンの手が動き、保持していたアサルトライフルが、中央の敵を照準し、火を吹いて——。

……そして、その瞬間。

紅い、風が疾った。

閃光。そして、爆音。

耳元で起こったかのごとく大音響を撒き散らしたそれは、同時に衝撃波で自分の機体を吹き飛ばした。思わず手を伸ばして自動姿勢制御プログラムを起動。

（なんだっ！？ 何が起こった……！？）

回転していく視界の中、どうにか状況を把握しようと眼を凝らす。その間にも、自動制御プログラムによって機体の姿勢が回復していく。

……と。ようやく、眼についたもの。

それは——残骸、だった。

原型は保っていない。手も足も腰も、そうであったであろう部品が散らばっていた。どう見ても、重量の半分以上が見当たらない。恐らく先の爆発で飛ばされたのだろう。

そして、それに混じるように。もはや原型などまるでとどめていない、黒焦げた肉と血と。

「な……んだ、と……？」

原型などまるで留めていなくとも、それが何なのかを彼は瞬時に理解した。それは、いましがた自分の隣で突撃していた、三機のうちの一機だ。

……つまるところ。先ほどの爆発は、こいつが？

ではなぜ？ 自分で爆発するなどありえない。自爆機能など存在しないはずだ。ではどうして？

はっとした。

そうだ。自分たちは今、戦っていたはずなのだ。身の程知らずの紅いドラグーンを八つ裂きにしようとする……。

(……紅い、ドラグーン、だと？)

びっくり、とした。直感にも等しいそれに、背筋が冷えていく。赤いドラグーン。聞いたことがある。知っている。まずい、やばい、それは、だめだ。

『う……ぐあああああああ……!!!!』

無線の向こうで、絶叫が聞こえた。

必死に音源を探す。見つけた。ここからまだ向こう。紅い機体と自分たちの仲間の一機。

「おい……おい！ やめろ、そいつは……っ!!」

必死に、無線に叩きつけるように言葉を放つ。

しかし、その言葉が届く事も、ましてや彼がそれを理解することもありえなかった。

なぜなら、瞬きほどの間もなく接近した紅い機体が、手にもった何かを、至近距離でそいつに発射したのだから。

再びの轟音。そして爆発。

(一撃……だと？)

信じられない思いで呟く。たった一撃……たった一撃で、撃沈。ありえない話ではない。もともと、ドラグーン的设计思想からして、装甲は薄いのだ。機関部に至近距離から弾丸を叩き込めば、一

撃で終わらせることも可能だ。

だが、しかし。

(……あの、速度で、か?)

背筋を、いやな汗が伝った。

馬鹿馬鹿しいほどの速度だった。馬鹿馬鹿しいほどの初速、馬鹿馬鹿しいほどの加速だった。眼で追うだけで必死だ。あんな動きをする化け物なんて、見たことも聞いたこともない。

あれほどの加速度であれば、とんでもないGが掛かっているはずで……しかし紅い機体は、まるでそれを気に留めた様子もない。

「おまえは……」

いつしか——胸の中にあつた恐れが、確信へと代わっていた。

紅い機体がこちらを向く。抵抗する気力も起きなかった。奴が加速姿勢に入る。恐らく、次の瞬間に自分は死んでいる。

「スカーレット 深紅の……ダイバー 流星——」

男の口がその名前を刻んだ瞬間、
彼は、宇宙の藻屑と消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0680x/>

バレット・ブルー 蒼穹のアストライア

2011年11月14日03時33分発行